

とさ 土佐日記

きのつらゆき 紀貫之



海賊の恐れ

¹はつかあまりみか 二十三日。日照りて曇りぬ。²「このわたり、海賊の³おそ

神仏を祈る。⁴はつかあまりよか 二十四日。昨日の同じ所なり。

⁵はつかあまりいつか 二十五日。楫取りらの、「北風悪し。」と言へば、船出^いださず。「海賊追ひ来。」と言ふこと、絶えず聞こゆ。

⁶はつかあまりむゆか 二十六日。まことにやあらむ、「海賊追ふ。」と言へば、夜中ばかりより船を出だして漕ぎ来る道に、手向けする所あり。楫取りして幣奉らすに、幣の東へ散れば、楫取りの申して奉る言は、「この幣の散る方に、御船すみやかに漕がしめ給へ。」と申して奉る。これを聞きて、ある女の童の詠める、

わたつみの道触⁶りの神に手向けする幣の追ひ風止まず吹かなむとぞ詠める。

この間に、風のよければ、楫取りいたく誇りて、船に帆上げなど喜ぶ。その音を聞きて、童も^{おむな}嫗も、いつしかと思へばにやあらむ、いたく喜ぶ。この中に、淡路^{あはぢ}の専女^{たうめ}といふ人の詠める歌、

追ひ風の吹きぬるときは行く船の帆手^{ほて}打ちてこそうれしかりけれとぞ。

天気^{ていけ}のことにつけて祈る。

¹二十三日 九三五（承平五）年一月二十三日のこと。
²このわたり 現在の徳島県海部郡美波町付近か。

³恐り 「恐れ」と同じ。

⁴幣 神に祈る際にささげる供え物。紙、木綿、麻などを使った。
⁵奉らす 「奉る」は、「奉る」のイ音便で、くだけた言い方。

⁶道触りの神 旅人を守護し、道中の安全を守る神。

⁷淡路の専女 淡路島出身の老女。

⁸帆手 帆を張るための綱。帆綱。